



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道からSDGs
Author(s)	石丸, 卓; 大橋, 敏伸; 吉田, 三千代 他
Citation	地域経済経営ネットワーク研究センター年報, 11, 23-28
Issue Date	2022-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84790
Type	departmental bulletin paper
File Information	050REBN_11_023.pdf



<コメントと質疑応答>

北海道から SDGs

講演者 石丸 卓（JICA 北海道 所長）
講演者 大橋 敏伸（東洋農機株式会社 監査役）
講演者 吉田 三千代（特定非営利活動法人「飛んでけ！車いす」の会 代表理事）
司会 樋渡 雅人（北海道大学大学院経済学研究院 准教授）

樋渡：これから、残り 2,30 分ほど質疑応答の時間とさせていただきます。質問がありましたら、チャットか、あるいはマイクのミュートを解除していただいて声を上げていただいて構いません。

それでは、チャットでいただいた、「石丸様、北大生と一緒に活動したことがありましたらお聞かせください」という質問です。

石丸：4月に着任しましてから、いろいろコロナ禍の行動制限があって、北大生の皆さんに限らず、いろんな方とお会いする機会がまだあまり持てていません。北大生の方々と一緒に活動してはいないのですが、私は、実家が北海道にあり、途上国で勤務をしている間も一時帰国の折には、以前より憧れていた北大の美しいキャンパス内を散策したり、こういうところで学びたかったなというような思いで必ず訪れておりました。

樋渡：ありがとうございます。

またチャットで石丸様への質問が来ております。「途上国の人々が日本との交流を通じて得た技術・経験を持ち帰るといった事業が多かったとのことですが、それらを自国に持ち帰った後、運用することへの支援など、経験を「活かす」ステップに関わる事業などはありますか」。研修員受入れとか、そういうことに関わる質問だと思いますが。

石丸：重要なポイントですね。我々は、研修事業が終わった後にいろいろなフォローアップの

仕組みも整えております。現地で JICA の研修を受けて帰られた方は、各国々で同窓会というのを作っていただいて、同じ研修を受けた経験を持つ仲間とか、そういう方たちとでグループを作り、いろいろな活動をされている事例が多くあります。それに対して、我々が資金的な支援も含めてそういった活動を応援するということもやっております。

また、今コロナ禍でできていないのですが、研修で北海道を訪れて、いろいろな交流があった講師の方とか指導役の方々に実際に彼らの活動を視察いただいて、助言あるいは示唆をいただいたり、こちらから応援に訪問をするというフォローアップのスキームもあったりと、いろいろ取り組んでおります。

樋渡：はい、ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

では、私のほうからお三方に質問したいと思います。

まず、石丸様には日本の ODA に関してお聞きしたいのですが、私も研究などでアフリカあるいは中央アジア地域によく行くのですが、年々感じているのは、やはり中国などはいろいろな経済インフラなど桁違いの額を投資してくるわけです。90年代、日本はトップ・ドナーとしていろんな国で援助をしてきたわけですが、今後、規模だけではプレゼンスを保っていくのが難しい気がしてまいります。そういった中で、日本の ODA の特色といいますか、強

みといったものを打ち出していくことがプレゼンスを高めていく上で重要ではないかと感じるのですけれども、日本のODAの特色とか強みという観点で何か思われていることがあればお聞きしたいと思います。

石丸：私も、ラテンアメリカ中心ですが、いろんな国で途上国の方と対話をして、一番感じるのは、多少情緒的な言い方になって本当に申し訳ないのですけれども、やはり最後は信頼関係なのだと思うのです。途上国の人は相手を見る力、見抜く力はあると私は思っていますし、実感として、お金がいくら多いからとか、規模が大きいからとか、そういうことではないような気がします。

それで、これはJICAというよりは、途上国に行って、何か彼らのためになりたい、役に立ちたいと思って行かれる方は、やはり彼らの立場に立って、彼らと肩を並べて、悩みを共有し、よく話を聞いて、日本のやり方を押しつけるのではなく、彼らが後々自立できるような形で後押しをしてあげる。そういういろいろな専門家の方々、インフラ事業にしても、事業を請け負った建設会社や商社の技術者の方々、営業の方々、日本人一人一人が現地の方々といい関係を築いて事業を行っていくということなのです。ですから、途上国の方からは、日本人の何とかという専門家には非常にお世話になった、非常に信頼できて尊敬できる人であるという話がいたるところで聞けるのが本当にうれしくもあり、やはりそれが日本の特色、強みだと思っています。

したがって、「信頼で世界をつなぐ」というJICAのビジョンに立ち返るわけですが、本当にそれを日本人一人一人の普通の接し方の中から途上国の方々に感じていただけているということは実感いたします。

樋渡：ありがとうございます。

私もその考えには同意しております、私がよく行く国は中央アジア、ウズベキスタン、クルグズスタンとか、そういう国なのですけれども、

特に最近、JICAは1990年ぐらいから30年ぐらい人材育成ということで移行国からたくさんの研修生を大学へ受け入れているのですが、彼らがどんどん上のポジションに上がって、どこの省庁に行ってもいるのです。あるいは、地方に行ったときに委員長が日本での経験があったり、そういうことがすごく増えていると感じておりまして、1度来た方は本当に日本のファンになる。韓国や中国、ほかの国からも来るのですけれども、この人材の蓄積はすぐにはまねできないものだと。それはすごく感じます。

では、会場から東洋農機の大橋様に、「日本の技術や考え方はインドの現地でどのように受け止められていましたでしょうか」という質問です。

大橋：初めてインドに行ったときに、ジャガイモの試験場のようなところに行ったのです。そこで、専門家の方と面談したのですが、何しに來たのだ、日本人に教えられることは何もないというようなことを最初に言われたのです。そうはいっても、いろいろ聞きたがるということがありました。それで、パンジャブのカウンターパートの方は、最初はやっぱり及び腰という感じでしたが、最終的には、もうおまえと俺は友達だと。やっぱり、成果を出して、見せてあげたというところに相手方は納得されたのではないかと思います。非常に高く評価されています。

それで、今、インドでの事業展開もと思ってやってきたのですが、コロナで中断している状況です。中国も、大分進出してきたのですが、コロナで渡航できない状況にあります。ですから、正常になれば、また当社としても全力で支援したいと思っています。以上です。

樋渡：ありがとうございます。

私は、大橋様の話で、収穫に関して、機械を使ったときに現行のやり方より損傷やロスが少ないというのは非常に驚きました。例えばウズベキスタンなども手で収穫するのですが、何で

手でやるかということ、機械でやってもうまくいかないからと。そういう答えを結構いただくのです。それで、今回、技術的なところで非常に驚いたのですが、今後事業展開していくとなると、メンテナンスであるとか、あるいは現地企業との競合であるとか、価格の面で合うようにしなければいけなかったり、いろいろな課題があると思うのですけれども、今後どういう課題があるかというようなことも教えていただきたいと思います。

大橋：今、交渉過程で一番苦労しているのは、ポテトハーベスタのビジネスということに対して彼らは確固たるイメージがないのです。当社は何十年もポテトハーベスタのビジネスをやってきて、こういう過程を踏んできたということがあり、インドの今の現状は十勝の40年前ぐらいの技術だなと感じていました。ですから、この時点であればこういうことが必要だと説明しても、もっと先に進んだ高望みをしてみたいというようなことがあって、なかなか納得いただけないという場面があります。

樋渡：事業展開というのは、輸出するだけでなく、現地企業のほうにも何か作っていただくということでしょうか、ベンチャーのような形で。

大橋：当社としては、輸出はできないと思っています。非常にコストの問題がありまして、難しいと思っており、やはり技術支援ということでノウハウを売りたいと相手に言っているわけです。それをワンステップにしようと考えています。そういった経験を積みば当社が将来海外展開をもっと積極的にできる下地ができるのではないかと思います、JICAの事業に応募したという経過もあります。

樋渡：現地でのカウンターパートなどは大体定まっているのか、今探しているという感じなのでしょうか。

大橋：今、交渉をしている最中です。それが、このコロナで。こちらからも伺えませんし、向こうからも来られないという状況であります。

樋渡：どうもありがとうございます。

会場から吉田様へ、「車いすの輸送に関して旅行者を活用されるとありましたが、他の手段はございますか。寄贈された車いすの耐久年数はどのくらいでしょうか」という質問をいただいております。

吉田：「飛んでけ！車いす」という名前ですけど、今は、飛べませんね。飛行機で海外に行くことができないので、今は「泳げ！車いす」というのをやっております。私たちに協力してくださるリサイクルのお店を持っている業者さんがいらして、その方たちが自分たちの商品を載せたコンテナの中に車いすを2台から、多いときは10台ぐらいまで詰めていって、そして現地にあるお店に利用者さんの団体などが取りに来るという形で、「体に合わせた、あなたへの」というのは変わらずに何とか続けることができます。ですから、今は海上輸送をしています。

それから、耐久年数なのですが、この辺は調査をしたいと考えておりますが、はっきりとは分からない部分なのです。ただ、使用者の名前を見ると同じ名前の方が何回か出てくることがありますので、体が大きくなったのか、病状が変わったのか、あるいは本当に壊れてしまっていて、もう一度要請をいただくのか、何回も使ってくださる方もいます。でも、先ほどお話ししたような整備講習ができたり、YouTubeの動画で細かい修理やその手の動きも見せながら撮ったものがあるので、そういうものを利用していただくと、もう少し耐久年数も延びるのかもしれない。

あと、カルメン君が7歳のときに使っていた車いすは、まだ修理しながら予備として持っているということを考えると、今二十歳ですから、結構長い時間使っていただいているのだなと思ったりもしています。

樋渡：ありがとうございます。

吉田様へのコメントで、「相手国の就労や生活の質向上につながる素晴らしい取り組みだと

思いました」とありますけれども、私も同感です。

私、「飛んでけ！車いす」の会の活動は昔から聞き及んでおりまして、授業にも参加していただいたりしたのですが、今日の話で、車いすを送るだけではなくて、整備講座も独り立ちするための就労につながる活動だと思います。レストラン事業の話なども出てきましたし、その先の就労とか教育ということ視野に入れた活動をされていることに非常に驚きましたが、その辺りは意図的に活動を広げていくという方針でやられているのか、最近の話なのか、もう少し意図を伺えたらと思います。

吉田：意図的というよりも、車いすがあれば当然生活の幅は広がるので、その中で結果として学校に行けるようになるとか、仕事が見つかるということはあると思うのです。

ただ、私も大事にしているのは、例えば、本当に寝たきりの方が車いすを初めてもらって、家族と初めてご飯を一緒に食べられた、家族の顔を初めて見てご飯を食べられた、そういうこともすごく大事だと思います。その方たちは教育や就労とは遠いところにいらっしゃる方かもしれないですが、そういう方たちのことも考えながら活動はしているつもりです。

それで、結果として、と申し上げましたが、JICAさんのおかげもあって整備技術を教えられたこともあり、車いすがさらに寿命が延びて、その車いすの整備をするということ自体がもしかしたら生活の糧の一部ということになることもあり得るのではないかと考えています。

樋渡：ありがとうございます。

続いて、吉田様に質問をいただいています。留学生の方だと思いますが、「飛んでけ！車いす」のインドネシアの参加者の属性に興味を持っています。特に、参加者の方々に女性が明らかに少ない理由を聞かせていただければありがたいです」という質問です。

吉田：女性が明らかに少ないというのは、例えば「飛んでけ！車いす」では車いすの学校とい

うのをやっており、車いすの整備も教えているのですが、やはり男性のほうが興味を持たれますね。女性がやらないということではなくて、私は逆に、62人のうちの17人が女性というのは割と多いのではないかと思います。車いすの整備ということ自体が、私もちょっとはやりませけれども、やはり力が必要ところもあったり、割と男性のほうが興味を持ちやすいというのはあるかと思うのです。特に明らかに少ないと私自身は思っていないのですが、逆に質問させていただきたいのですが、じゃあどうやったら女性の方にも興味を持っていただけるか、何かアドバイスがあったら教えてください。

樋渡：ありがとうございます。セン・レイサンさん、もし何かあれば。

セン・レイサン：発表ありがとうございます。

この質問をしたのは、女性を増やすにはというよりも、車いすを使う人々に、体あるいは性格的に見て、男性と女性という区別はないと思いますが、62人のうち17人しか女性がいないので、それは何か社会的な理由あるいは家庭的な理由があるのではないかと考えてこのような質問をさせていただきました。

樋渡：もしそうだとすると、どうすれば女性の参加者を増やせると思いますか。

セン・レイサン：女性の参加者を増やすためのアドバイスですか。

樋渡：自分だったらどうするかという具合に考えていただけたらと思います。

セン・レイサン：実は、インドネシアの状況にも詳しくはないのですが、今、私もフィールドワークをやっていて、男性と女性ではもともと家庭での役割が違って、女性にはそんなに自由な時間がないとか、あるいは出かけることがあまり許されないのであれば、そこからそれを解決できる余地があるのではないかと思います。

吉田：ありがとうございます。

私も少ない経験の中ですが、まず、障がい者

ということで一つ大きな壁が皆さんにあるのです。それプラス、女性であること、さらにもう一つ壁があります。男性が一つの壁を持っているならば、女性はもう一つ壁を持たなければならないということを聞いたことがあります。それは、もちろん教育を受ける権利が少なかったり、女性は家にいるものだというふうな考え方があったり、もともとそういう考え方があるのではないかと思いますし、女性はやっぱり結婚して家を出るべきだというような考え方がある中では、女性の障がい者というのは家にとってはあまりいてほしくないというような、そういう存在にもなり得ることもあるのではないかと思います。

あまりお答えになっていないかもしれませんが、もっともっと女性の参加があるとうれしいと思います。ありがとうございます。

セン・レイサン：ありがとうございます。

樋渡：ありがとうございます。重要なテーマだと思います。

では、「大橋様、GPS 等を利用した無人農機の可能性について、どのようにお考えでしょうか」という質問です。

大橋：当社の商品開発は、そこに注力しているところです。ロボットトラクターを使うためのロボット作業機の開発も、いろいろなプロジェクトに参加しているところです。これは、海外展開というより、国内のプロジェクトに参加しています。以上です。

樋渡：インドで労働力不足という話も非常に興味があったのですが、今そういうロボット、AI とか、経済学などでもそれが逆に就労を減らしてしまうのかどうかということが結構議論されたりしています。インドではそういう意味での機械に対する抵抗のようなものはあまり感じられなかったということでしょうか。

大橋：いや。あると思います。

一番問題なのは、ジャガイモのシステムが高度に自動化しても、そのほかの作物があるわけです。例えば、三毛作ですから、3種類の作物

が同じぐらいに省人化されていなければ少ない作業でやれるということにはならない。あの作業は人手を要する、この作業は人手が要らないということでは非常に経済的でないということになりますね。そのために、投資の決断が非常に難しいのではないかと思います。ですから、大金持ちは機械を買ったり、最新のシステムを入れている。インドに行って驚いたのは、もの凄く貧しい人も見ますが、もの凄い金持ちも見るのです。このギャップというのは日本人の感覚を超えています。そういう人たちのどこにフォーカスすればいいのかというのが、当社としては非常に難しいと思います。

樋渡：どうもありがとうございます。ほかに質問等ございませんでしょうか。

では、私のほうから皆さんに質問させていただきたいのですが、今回のテーマは「北海道から SDGs」だったわけですが、今、コロナ禍などで国際協力とか行き来することがなかなか難しい状況にあると思うのです。そういった中で北海道のどういう強みを生かしていけるのか。既に部分的にお話はいただいているのですが、今回、参加者も北海道の方が多いですので、どういう観点からでもよろしいので、何かお考えがあればお聞かせいただきたいと思います。

では、石丸様からよろしいでしょうか。

石丸：プレゼンの中でもちょっと触れましたが、北海道にはいろいろな知恵や経験、試行錯誤のプロセスが詰まっていると思うのです。意外と北海道民の方は気づかないし、日常の風景に溶け込んでいるのですが、農業にしろ、観光にしろ、ブランディングにしろ、まちおこしにしろ、寒冷地のインフラの整備やメンテナンスとか、ありとあらゆる部分に先人の知恵や技術者の経験が詰まりに詰まっているという印象を受けています。

もちろん、同じような経験を持っている都府県もあるかもしれませんが、やはり北海道には北海道なりの過去の蓄積というのがあって、それが北方圏を中心に貢献ができているというこ

とだと思うのです。

したがって、そういうことだけに限らず、北海道民のチャレンジ精神というか、いろいろな文化を受け入れ、または外に出て行って、いろんな人と交われる、そういう気風を持った道産子がますます世界に飛び出して、あるいは地元においても簡単にオンラインで海外の人とつながれる、そういう時代が来ていますので、積極的に交流を図っていけば、必ず北海道ファンが増えるし、選ばれる北海道になっていくのだという思いであります。

樋渡：どうもありがとうございます。

大橋様、もしありましたらよろしく願いいたします。

大橋：当社の最大の問題は、システム全体を売っているわけではないということです。北海道の農業機械メーカーというのは非常にすみ分けをうまくやっていて、みんなそこそこ生きていけるわけです。それゆえに、ポテトハーベスタのためにポテトプランターとか、その前の畑を起こす機械とかいうのを当社はやっていないわけです。本当はオール北海道でそういうメーカーが揃うわけですから、まとまるともっと高度なものができるのではないかという気がしました。

樋渡：ありがとうございます。

吉田様、もしあればよろしく願いいたします。

吉田：先ほど石丸所長が言われたようなチャレンジ精神というのは、やはり北海道民ならではのだろうと思います。

あと、地域のネットワークが割と強くて、例えば北海道 NGO ネットワーク協議会というものがありますが、その協議会自体は大きな動きは

なくても、それぞれの横つながりが大変強くて、意見交換などをすごくよくしているのです。そういうことも強みであろうと思いますし、例えば、この頃行けませんが、飲み屋さんに行くと、隣の席の人とすぐ打ち解けられるというような気質がありますね。海外に行っても、海外の人とすぐ打ち解けられるような気質、それは大切だと思いますし、それも道民の特徴だと思っています。

樋渡：ありがとうございます。

私も北海道大学にしまして、大学の特徴として学部間の連携がやりやすいというか、東京にいた頃はもうちょっと各学部が孤立していた気がするのですが、そういうオープンな気質というのもあるような気がしました。

あと、北海道は農業、観光、そういったところで本当に途上国が参考にしたいと思っているところも非常に多いと思いますし、いろいろな国際協力の可能性があるのではないかと思います。

それでは、これで締めさせていただきたいと思います。本日は、参加者の皆様どうもありがとうございました。

コロナ禍で難しいのですが、少子高齢化や人口減少の問題を考えれば必ずこういった国際協力が重要になっていくと思いますので、これからもこういった問題を考えていければと思っています。

本日は、どうもありがとうございました。

石丸：皆さん、ありがとうございます。

吉田：ありがとうございました。お疲れさまです。

大橋：ありがとうございました。